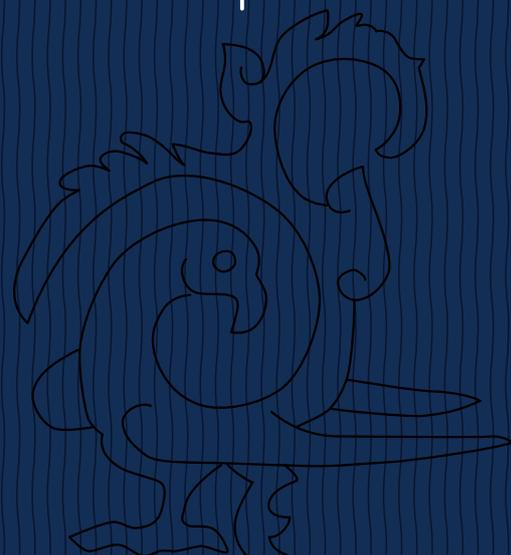




穂月明「薬師寺東塔」

美の視点—穂月明の収集古物を紐解く—



伊賀市 ミュージアム あおやまうたのいえ 青山讃頌舎  
2020年秋の企画展



伊賀市 ミュージアム  
あおやまうたのいえ  
青山讃頌舎

目次

はじめに	3
<b>1. 穂月明と収集資料</b>	
穂月明の原点「金冬心」	4
本来の仏教を求めて	6
愛好した文学	8
陶磁器と作品	10
<b>2. 仏教への視点</b>	
仏教資料の収集	11
仏画・仏像資料と作品	12
大般若経守護十六善神と大般若経	14
<b>3. 歴史・文化への眼差し</b>	
古瓦で見る歴史	15
古鏡で見る歴史	18
古の石仏	20
書への敬意	21

凡例

- 資料名の最後に\*を付したものは期間中に入れ替えがありません。
- 資料名の最初に「参考」と有るものは実物展示は有りません。

## はじめに

穂月明あきづきあきつは独自の美意識と見識を基に多様な古美術を集めていました。収集は二十代の骨董市に始まり国内屈指の質と量を誇るガンダーラ美術を収集するまでに至ります。ガンダーラ美術等は龍谷ミュージアム設立時に寄贈され展示の中核の一つを担っています。残されたコレクションも多種多様で単なる骨董ではなく歴史的にも考古学的にも価値の高いものが多く有ります。

今回の展示を機に多くの方にその存在を知って頂き、穂月明作品理解の一助というだけでなく、教育や研究に役立てて頂きたい企画致しました。コレクションの調査研究はこれからですが、きつと驚きや発見があると思います。

一般財団法人東洋文化資料館 青山讚頌舎

理事長 穂月大介



穂月明「莊子屏風」 (一財)青山讃頌舎蔵

「莊子屏風」は大学卒業間もない頃の作品と考えられ、書体も人物の描き方も金冬心の影響が見られる。

# 1. 穂月明と収集資料

## 穂月明の原点「金冬心」

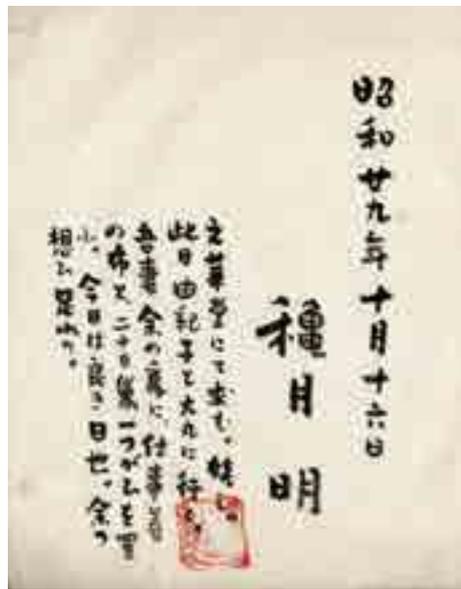
金冬心は清朝乾隆帝の頃の文人です。官吏を目指すも叶いませんでしたが文人としては一流で書画に秀で独自の画法・書法を生み出しました。

明は金冬心の画集に触発され水墨画を始めたと言われます。掲載資料の書籍は明が若い時に買い求めたもので金冬心を敬愛していたことがよくわかります。また莊子屏風は書体と人物の描き方に影響が見て取れます。しかし、次第に金冬心のスタイルを離れ、洋画の素養を活かし子供の頃から親しんだ仏教を題材に独自の世界を切り開きます。

金冬心のような縛られることない自由な絵画を目指したのでしょうか。明が絵に詩文を書き添えるのは文人のスタイルです。

# 明の「金冬心」資料

明が大切に保管していた金冬心の書籍には自身の印が押されコメントが記されています。当時なかなか手に入らなかったであろう書籍を手にした喜びが伝わります。



『金冬心梅花冊』裏表紙  
本を手に入れた喜びを記している。



『美術雑誌アトリエ』（S21.9月号）金冬心特集  
墨書は「不添玩」、下の印は「亀」。不添は当時の明の号、印も当時のもの。



『美術雑誌アトリエ』（S21.9月号）より金冬心の仏画  
明の「莊子屏風」の奔放さはこの金冬心の作風を思わせる。



伝金冬心画賛「梅花図」（一財）青山讃頌舎蔵

## 本来の仏教を求めて

明は僧侶の末子として生まれ、愛媛県の実報寺で育ちます。京都美大時代は京都醍醐寺に下宿し、その寺の娘を妻にします。ずっと仏教が傍らにあり、父親も僧侶、教育学者として尊敬されていましたので仏教はとても身近なものでした。

明は仏教を自然と心の中心に置いていましたが、信心や作法にこだわるのではなく、あくまで仏教の本質を追求していたようです。そのため正大蔵経、南伝大蔵経、正法眼蔵、碧巖録、大般若経、両界曼荼羅など宗派を超えて膨大な仏教資料を収集しています。

また仏像の始まりガンダーラ仏のコレクションは質量ともに国内屈指のものでした。「釈迦の仏教」に近づきたいという思いの現れだったのでしょう。「ガンダーラコレクション」は龍谷ミュージアム設立の折、寄贈され龍谷ミュージアムの展示の中核の一つとなっています。



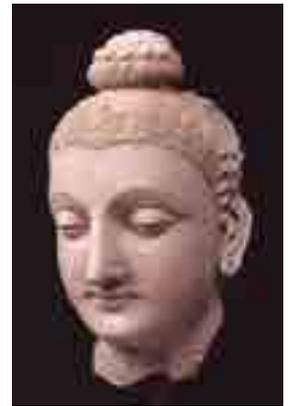
「ガンダーラ破風型彫刻」 伊賀市蔵  
欄干の内側に供養者が彫られている。



[参考] ガンダーラ仏伝浮彫「出家前夜・出城」  
2~3世紀・伊賀市蔵  
伊賀市に寄贈されたガンダーラコレクション。



[参考] 龍谷の至宝・ガンダーラ  
「菩薩立像」石造  
2~3世紀・龍谷ミュージアム蔵



[参考] 龍谷の至宝・ガンダーラ  
「仏頭部」ストウッコ  
4~5世紀・龍谷ミュージアム蔵

## 龍谷の至宝

龍谷大学創立三八〇周年に「龍谷の至宝」として取り上げられた穂月コレクションのガンダーラ仏。圧倒的に美しい仏像です。



「悲願金剛曼荼羅」 伊賀市蔵 \*

密教の宇宙観を表す胎藏界曼荼羅の地藏院。中尊は菩薩形の地藏菩薩。



穂月明「十牛図・牧牛」 (一財) 青山讃頌舎蔵

禅の悟りに至る過程と境地を表した十枚の図解の中の五番目「牧牛」、取り戻した自分を飼いならす段階。オリジナルは中国南宋の禅僧廓庵作。

## 愛好した文学

明の教養の基本は經典を含む漢詩・漢文だったので、絵に添えられた賛を見  
ると和歌、俳句、川柳、俗謡、民話など大変幅広く取材しています。また、書籍  
資料ばかりでなく種田山頭火や窪田空穂などの作家の直筆も集めていました。



われあいすさんちゆうのみまつ  
種月明「我愛山中松」 (一財)青山讚頌舎蔵

賛は「山中松」。宋末の詩人真山民の漢詩4連作「山中雲」「山中月」「山中梅」「山中松」の一つ。



『御選唐宋詩醇』 伊賀市蔵

清朝乾隆帝が自ら選んだ唐と宋の詩人の詩集。杜甫、李白、白居易、蘇軾などの詩と批評が付けられている。これは中国で出版された袋綴じの本。帙の題箋は明直筆。





窪田空穂直筆和歌「夏之歌」

伊賀市蔵

"睡蓮の鉢より出でし蜂ありて  
あし長く垂れ真すぐにのぼる"  
昭和20年戦時下の歌集『明闇』  
掲載、見出しに「灼熱きわまる」  
とある。



穂月明「富嶽青松」 (一財)青山讃頌舎蔵

賛は窪田空穂歌"我が経たる代には優りて落ちつける代にし生くべし我に代わる子ら"昭和2年作。歌集『青朽葉』掲載、見出しに「時代を思うて」と有る。窪田空穂は明治から戦後にかけて活躍した歌人。明は好んで賛に用いている。



『露伴評釈 芭蕉七部集』 伊賀市蔵

明治の小説家幸田露伴が詳しい解釈を付けた芭蕉七部集。明は本を大切にしたが、この本はカバーを付け、箱もカバーし、その上から取り出しやすいケースを作り題箋を貼っている。特に大切にしていたことが伺われる。

# 陶磁器と作品

明は貴重な古陶も収集していましたが、好んで画材としたのは現代作家の作品や雑器でした。親しみやすさや素朴さを大事にしていたようです。



穂月明「壺の椿」 (一財)青山讃頌舎蔵



「染付花入」 (一財)青山讃頌舎蔵



穂月明「白椿」 (一財)青山讃頌舎蔵



「絵志野大皿」 (一財)青山讃頌舎蔵



穂月明「織部皿の桃」 (一財)青山讃頌舎蔵



「織部皿」 (一財)青山讃頌舎蔵

## 2. 仏教への視点

### 仏教資料の収集

各種大蔵経や問答集の他、曼荼羅などの仏画や仏像、法具など幅広く収集してまいりました。仏教真理の追求の他に「祈りの世界」というもう一つのテーマがあったようです。



穂月明「倣金剛峯寺涅槃図」(一財)青山讃頌舎蔵  
日本最古の涅槃図(国宝)の穂月明による模倣。



『南伝大蔵経』伊賀市蔵  
各種仏教書が並ぶ書庫。



「図像抄風天」伝鎌倉時代 伊賀市蔵  
風天について図像や真言などが記述されている。

# 仏画・仏像資料と作品

書籍資料だけではなく、古い仏画や仏像も収集し作品に活かして行きました。これは不動三尊像の作品と古画と仏像です。



穂月明「不動三尊」 (一財)青山讃頌舎蔵  
 左から制吒迦童子、不動明王、矜羯羅童子。



仏画「不動三尊」\*  
 伝鎌倉時代 紙本彩色 (一財)青山讃頌舎蔵



仏像「不動三尊」\*  
 江戸時代 木彫 伊賀市蔵



拓本「北魏線刻菩薩立像」

北魏 伊賀市蔵

約1mの線刻の菩薩立像。銘に「永平二年(509)昌法寺敬造」とある。



仏画「文殊菩薩五尊像」\*

室町時代 (一財)青山讃頌舎蔵

五鈷杵を乗せた蓮華と宝剣を執る五髻の文殊菩薩が獅子に乗り、四眷属とともに海上を渡る姿を描く。文殊渡海図・五台山文殊と通称される。金を多用した佳作。



仏画「吉野曼荼羅」\*

江戸時代 (一財)青山讃頌舎蔵

山中に大峯八大童子を配した金峯山の景観を上方に描き、下方には吉野山で祀られる蔵王権現を中心に、役行者前鬼後鬼と吉野八所明神を表す。



仏像「増長天」\*

江戸時代 伊賀市蔵

四天王の一尊、南を守る。



仏像「三尺菩薩立像」

平安時代 伊賀市蔵

約1mの一木造の立像。



仏像「愛染明王坐像」\*

江戸時代 伊賀市蔵

密教独特の明王の一尊。

# 大般若経守護十六善神と大般若経

大般若経はそれ自体に村を守護する力があるとされ、村々が六百巻の経典を持ち転読の法事を行っていました。明は転読の法事に掛ける「大般若経守護十六善神」をユーモラスに描いています。



穉月明「大般若経守護十六善神」 (一財)青山讃頌舎蔵



「大般若経」全巻 伊賀市蔵

六百巻の経典が収められている。明が収集。



「笈」 伊賀市蔵

修験者が仏具、生活道具等を運んだ背負子。「大般若経守護十六善神」の三蔵法師は天竺の経典を入れて背負っている。

### 3. 歴史・文化への眼差し

#### 古瓦で見る歴史

明の古瓦コレクションは江戸時代から中国春秋戦国時代の瓦にまで及びます。古瓦を美しいものとしてだけではなく、その背景に三千年の歴史の重みを感じていたのでしよう。

日本の瓦のルーツは中国の西周時代（紀元前一一〇～八世紀）位まで遡り、春秋戦国時代に各地に広がったようです。漢（紀元前三〇～紀元三世）の時代に大いに発展しますが、朝鮮に伝わるのは魏晋南北朝（三～六世紀）です。日本には朝鮮を通じて飛鳥時代（六世紀末）寺院の一部として蓮華文の軒丸瓦が入ってきます。以後平安中期まで軒丸瓦の文様は蓮華文のバリエーションでした。その後、巴文（水を表す）や文字文などが使われるようになります。

また瓦を使う建物はほぼ寺院と官衛の建物に限られます。安土桃山時代に近世城郭に使われますが庶民に広まるのは江戸中期防火のため庶民に瓦屋根を奨励してからです。ちなみに官庁である大極殿は瓦ですが、天皇の住む内裏は檜皮葺です。瓦屋根は夏は暑く冬は寒く雨が降るとうるさく住みにくいのです。

#### 中国



春秋戦国 (B.C.770~220)

鹿紋瓦当 伊賀市蔵

瓦当とは軒丸瓦の先端の部分を指す。中国では西周時代 (B.C.1100~771) 頃から瓦屋根の家があった。日本では縄文時代から弥生時代が始まろうとしていた頃で、竪穴式住居か高床式住居しかなかった。この瓦は釈迦や孔子が生きていた時代のもの。



漢 (B.C.220~A.D.206)

左・四神白虎瓦当、右・文字瓦当 伊賀市蔵

瓦は漢の時代に大きく発展し様々なデザインが作られ洗練されていく。中でも文字瓦当は当時の漢字の字形を知る貴重な資料でもある。右の文字瓦当は「長生無極」。



〔参考〕竪穴式住居  
京都府山城郷土資料館蔵  
竪穴式住居は縄文時代（紀元前一二〇〇〇）から室町時代（十六世紀）頃まで使われる庶民の家です。断熱性に優れ冬暖かく夏涼しく建てやすい住まいです。



統一新羅時代 (668~900)

慶州出土蓮華文瓦

(一財) 青山讃頌舎蔵

朝鮮の蓮華文瓦は日本とは違うデザインに発展する。



#### 朝鮮

朝鮮三国時代百濟

(B.C.1世紀 ~A.D.660)

扶余郡恩山面金剛寺丸瓦

(一財) 青山讃頌舎蔵

百濟の単弁蓮華文瓦。日本の初期の寺院・飛鳥山田寺の単弁蓮華文瓦などはこの瓦と大変よく似ており百濟の影響が濃いことが分かる。



天平時代 (729~749)  
薬師寺複弁蓮華文瓦 伊賀市蔵



天平時代 (729~749)  
薬師寺唐草文瓦 伊賀市蔵



白鳳時代 (645~710)  
薬師寺獣身文鬼瓦 伊賀市蔵



白鳳時代 (645~710)  
川原寺複弁蓮華文瓦 伊賀市蔵  
川原寺式軒瓦は最も初期の複弁蓮華文瓦で大変丁寧に作られている美しい瓦。以後のデザインに引き継がれる。



白鳳時代 (645~710)  
西安寺 (舟渡神社) 重弧文瓦 伊賀市蔵



飛鳥時代 (592~710)  
山田寺単弁蓮華文瓦 伊賀市蔵



飛鳥時代 (592~710)  
山田寺単弁蓮華文垂木先瓦 伊賀市蔵

百済の蓮華文瓦の影響が強い。軒瓦だけではなく、垂木の先端の装飾にも使われた瓦。



穉月明「薬師寺東塔」(一財) 青山讃頌舎蔵  
薬師寺は680年天武天皇の発願とされ、平城遷都後8世紀初めに現在の地に移転した。絵は整備復元される前の荒れた薬師寺を描いている。文化財保護の歴史を考えさせられる。



穉月明「法隆寺礼拝」(一財) 青山讃頌舎蔵  
法隆寺は世界最古の木造建築、現存の寺院は8世紀初めの建物。創建には聖徳太子が関わっているとされる。この絵は今も信仰されている法隆寺を描いている。



鎌倉時代 (1185~1333)

法隆寺文瓦 伊賀市蔵

斑鳩の法隆寺の瓦。寺名が瓦に書かれている。



平安時代 (794~1185)

宇治出土蓮華文瓦 伊賀市蔵

平安時代になると複弁蓮華文も簡略化されてくる。



江戸時代 (1603~1868)

仁和寺阿弥陀種字金箔瓦 伊賀市蔵

仁和寺の本尊阿弥陀如来の種字キリークを描いた瓦に金箔を施した豪華な瓦。歴代の門跡を皇室が務め三室御所と呼ばれた。



鎌倉時代 (1185~1333)

石清水八幡宮巴文瓦 伊賀市蔵



平安時代 (794~1185)

石清水八幡宮巴文瓦 伊賀市蔵

平安中期になると巴文や文字瓦が使われるようになる。



鎌倉時代 (1185~1333)

石清水八幡宮剣頭文瓦 伊賀市蔵

今は神社だけになった石清水八幡宮だが明治の神仏分離令以前は山上に寺院が立ち並んでいた。



平安時代 (794~1185)

平安京緑唐釉草文瓦 伊賀市蔵

平安京の宮殿などには緑色の釉薬をかけた美しい瓦が使われた。



〔参考〕板葺きの商家  
江戸東京博物館シオラ  
マ展示  
江戸中期までの都市の家は板葺きが主流でした。しかし江戸の町は何度も大火に見舞われ、幕府はその対策として瓦屋根を推奨しました。その頃から瓦屋根は庶民の家にも広まります。



〔参考〕葦屋根の農家  
種月明「思いの富士山  
(一財) 青山讀頌舎  
今は殆ど見かけませんが牛や鶏と一緒に家族が暮らしていました。芭蕉翁も『おくのほそ道』で「蚤虱馬の尿する枕もと」と詠んでいます。

## 瓦屋根が普及する前の庶民の家

## 古鏡で見る歴史

明は文人に憧れ中国文化に強い関心を持っていました。古代中国の古鏡は老子や孔子の時代をも感じられるものだったでしょう。

鏡は古代から江戸時代まで青銅製の銅鏡でした。銅鏡が日本に入ってくるのは弥生時代で中国鏡が遺跡から見つかります。しかしなんとと言っても大量の銅鏡の出土が有るのは古墳からです。日本製の物も有りますが多くの中国鏡が古墳から発掘されます。祭祀の道具であり宝物だったのでしょう。奈良時代になっても中国ブランドは人気で唐の鏡は正倉院御物や神社の御神体として今に伝えられています。

鏡のデザインが国風化されるのは平安時代くらいからです。江戸時代には持ちやすい柄のついた手鏡が一般化され庶民にも広がります。銅鏡はガラス鏡と違い錆びて曇ります。鏡磨きという職業が有り曇った鏡を磨き錫・水銀アマルガムで鍍金し鮮明に映るようにしてくれました。

## 中国古代の鏡



春秋戦国 (B.C.770~220)

蟠螭文鏡 19cm 伊賀市蔵

青銅器は殷 (B.C.17~10 世紀) の頃に技術もデザインの精緻さもピークに達する。銅鏡は春秋戦国時代ごろ現れるが、この銅鏡の文様・蟠螭文は殷の青銅器から見られる。唐草のように見えるが龍が絡まった文様。



春秋戦国 (B.C.770~220)

細文地鳳文鏡 12cm 伊賀市蔵

細かい地紋に鳥 (鳳凰) が描かれている。この鳳文も殷の青銅器に描かれている。

## 日本でも出土する中国鏡



前漢 (B.C.206~8)

内行花文鏡 25.5cm 伊賀市蔵

静岡県松林古墳出土鏡など日本の弥生墳墓や古墳からも多数出土する。中国製と日本で模造されたものが有る。



前漢 (B.C.206~8)

方格規矩草葉文鏡

16cm 伊賀市蔵

銘文は「見日之光天下太陽」か。同類の鏡は福岡県から出土報告がある。



前漢 (B.C.206~8)

星雲文鏡 16cm 伊賀市蔵

この文様は中国の宇宙観を表すとも龍の変形とも言われる。同類の鏡は福岡県の弥生中期墓等から出土報告がある。



古墳に副葬された銅鏡  
古墳は古墳時代 (三〜七世紀) の王や首長の墳墓です。勾玉やガラス玉、剣や甲冑、馬具などと共に銅鏡も出土します。三角縁神獸鏡などは三十面以上の出土も稀に見られます。



唐 (618~907)

海獣葡萄鏡 16.5cm 伊賀市蔵

唐を代表する鏡、日本にも多くもたらされ高松塚古墳などからの出土や、正倉院や神社の御神体として伝世品も多い。海獣とは海外の獣という意味でライオンや孔雀、昆虫も見られる。葡萄はシルクロードの名産で西方の文化がシルクロードを伝って中国にきたことを示す。



後漢 (25~220)

画文帯同向式神獸鏡

18.5cm 伊賀市蔵

日本各地の古墳から出土。中国の神仙思想を表した鏡で神と神獣が描かれている。



「参考」城陽市青塚古墳出土鏡  
京都府立山城郷土資料館蔵  
日本で出土した日本製の鏡です。中国の鏡を模倣しています。  
上「乳文鏡」下「四獣形鏡」



「参考」古墳の鏡の出土状況  
宇治市金比羅山古墳  
写真提供 京都府立山城郷土資料館  
古墳の埋葬施設内で勾玉などとともに鏡が副葬されていたことが分かります。



江戸時代 (1603~1868)

藤原光政銘南天柄鏡

17.5x27cm 伊賀市蔵

江戸の手鏡。藤原光政の銘があるので安永 (1772~1781) 頃の鏡と思われる。江戸時代の庶民が使っていた柄鏡で「南天」の図柄は「難を転ずる」を掛けている。その他蓬莱鏡や家紋の入ったものなど意匠は様々。



平安時代 (710~784)

松双鶴文鏡 13cm 伊賀市蔵

松と鶴の平面的で日本的な意匠となっている。



奈良時代 (710~784)

鳥獣八稜鏡 15cm 伊賀市蔵

唐の鏡を真似た国産鏡と思われる。弥生時代より中国鏡を真似て日本でも銅鏡は作られていた。八稜鏡は奈良時代に流行った鏡で日本的な意匠も見られる。



桃山時代 (1568~1598)

蓬莱鏡 14.5cm 伊賀市蔵

鶴亀松竹梅をあしらった仙鏡を表している。桃山時代から盛んに作られ江戸時代の庶民の手鏡にも見られる。

## 日本で発展した鏡

いとしえ  
古の石仏

「野の仏」は明の代名詞とも言える作品群で、長く描き続け様々な石仏を描いています。収集した石仏も古代インドのガンダーラ仏や、古代中国の石仏、当館の玄関には韓国の石人、庭には日本の野仏と様々です。



穉月明「磨涯仏・阿弥陀三尊」  
(一財) 青山讃頌舎蔵



穉月明「道・野の佛」  
(一財) 青山讃頌舎蔵



随代菩薩立像  
伊賀市蔵



唐代文殊菩薩座像  
(一財) 青山讃頌舎蔵



頭慶五年銘唐代仏龕  
伊賀市蔵

## 書への敬意

明が最も高く評価していた芸術は「書」といつてよいでしょう。収集した書は文人、作家、天皇、皇帝、僧、金石文、など幅広く集めています。作意のない書を好みました。



満州国第一代皇帝溥儀「偉烈純忠」伊賀市蔵

「ラストエンペラー」清朝最後の皇帝愛新覚羅溥儀の書。意味は偉大な功績と一途な忠義。



「龍門二十品」拓本\* (一財) 青山讃頌舎蔵

中国龍門石窟内の造像記のうち特に優れた二十点を龍門二十品という。北魏(495~520)の時代に彫られ六朝時代の楷書を今に伝える。



「鄭道昭」拓本\* (一財) 青山讃頌舎蔵

鄭道昭は北魏(495~520)の書家として知られ多くの石碑を残した。六朝楷書の名手。



于右任「敬天愛人」(一財) 青山讃頌舎蔵

辛亥革命の革命家の一人。文人で書家としても名高く標準草書としてまとめた書体は簡体字の字形に取り入れられている。明は台湾で日本では無名だった于右任の書を見て惚れ込み収集を始めた。日本で最初の于右任の発見者・コレクターと言って良い。

## 謝辞

本展の開催並びに図録の作成にあたり、次の方々から御助言、御協力を頂きました。記して心より感謝申し上げます。

### ■協力機関・協力者（敬称略）五十音順

伊賀市教育委員会文化財課

江戸東京博物館

京都府立山城郷土資料館

宮治昭

龍谷ミュージアム

### ■参考文献

『古鏡』樋口隆康 株式会社新潮社 昭和五十四年十月三十日

『和鏡の研究』広瀬都巽 角川書店 一九七八年六月三十日

『中国古代瓦当…西周・戦国・秦・漢時代の瓦当及びその瓦拓等の

文様・書法表現の芸術的特徴について』東園恵 一九九六年二月

『かわら日本史』駒井鋼之助 雄山閣出版 昭和四九年六月

『窪田空穂全集』窪田空穂 株式会社角川書店

伊賀市ミュージアムあおやまうたのいえ青山讃頌舎

2020年秋の企画展

美の視点―穠月明の収集古物を紐解く―

発行日 令和2年9月1日

編集 一般財団法人 東洋文化資料館 青山讃頌舎

発行 公益財団法人 伊賀市文化都市協会

〒518-0809

三重県伊賀市西明寺3240番地の2

☎0595-220511

印刷 上野印刷（株）



